

---

# 実希story

M 3 0

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

実希 story

### 【Nコード】

N9259K

### 【作者名】

M30

### 【あらすじ】

ある日、実希は、父が母を殺す現場に遭遇してしまう。

その後、実希の生活はガラリツと一変したのだが、そこに待ち受けていたものとは……!?

M30の四人で書いた、何でもあり小説です。

最初は現代でシリアスめにはいつていますが、基本ギャグ<sup>モダン</sup>？です。

ちなみに、実希はM30の一人をモデルとしていて、仇名がニワトリ、またはヤキトリ、というのがこの話では重要だったりそうじゃなかったり。

また、他の登場人物もM30のメンバーがモデルだったりします。  
一章が短く、ドタバタコメディなので、暇なときにどうぞ。  
b y M ・ Y

## 第一羽（前書き）

この小説は、M30の四人リレー小説で書いたため、書き方が違ったり、ということもありますが、ご容赦ください。

また、最初のほうはシリアスですが、全体的には基本ギャグで成り立っている、ドタバタハチャメチャなコメディです。

素人集団で書いているので、生暖かい目でみてもらえると幸いです。ところどころ、意味不明なものが出てきますが、笑い飛ばしてやってください。

b y M ・ Y

## 第一羽

「実希！ 起きなさいっ。 遅刻しますよっ！」

いつもなら聞こえてくるはずの母の声が聞こえない。

ふと時計を見ると、7時と表示されている。

実希は、少し首をかしげて布団から飛び起きリビングへと向かう。

普段なら、とっくに起こしに来てるのに。

心の中で呟きながらも、実希は顔をしかめた。

腐臭がする。

何で？と思いつつも、リビングへと近づいていくと、腐臭はだんだん強くなっていった。

生ごみを捨て忘れたのだろうか。

そう考えながら、リビングのドアを開く。

ギィィッ

実希の目の前に突如、赤い光景が広がる。

彼女の前に現れた光景。

それは、父が母を殺しているものだった。

父は実希に気づくと、ニイヤアアッと笑う。

その姿は鬼のようだった。

そして、父は狂ったように笑い始めた。

家中が狂気に満たされた。

父は笑い止むと、一步。 また一步。 と、実希に近づく。

実希は怖くなり、咄嗟とっさに床に散らばる包丁をつかむ。

その後、彼女の目の前は真っ赤に染まった。

そして、彼女

実希は倒れた。

実希が起きたとき、彼女の足元には父の死体が転がっていた。

実希は、その死体に刺さった包丁を見て思い出す。

あつ。 そういえば、うちが父さんを刺したんだっけ？

実希は無表情に父と母を一瞥し、家から去っていった。

## 第一羽（後書き）

作 M・Y

この小説は、四人で書いているものです。

ちなみに、一章は、M・Y。つまり、私です。この小説を書き始めたきっかけは、私がリレー小説を書きたいとダダをこねたことが始まりで、主人公のモデルは、M30の一人です。暇なときにも読んでもらえるとうれしいです。

## 第二羽（前書き）

実希のモデルは、ハチャメチャで楽しい愛されキャラで、モデルといえはモデルですが、そんな非道なヤツじゃなくていいやつです。

あと、実希のモデルの仇名はニワトリ、もしくはヤキトリといいます。ちなみに眼鏡をかけています。

この作品では重要事項だったりするので、それを踏まえて読んでいただけるとうれしいです。

b y M ・ Y

## 第二羽

ぼーっと歩いているうちに、駅の近くまで来ていた。

通勤ラッシュの時間を過ぎたので駅に向かう人は少ない。

実希は、前を歩いていた幼児と母親らしき人がこっちをじろじろ見ているのに気づいた。

「……………」

実希は、自分が全身返り血で真っ赤なことを知らない。

「あ…あのお……。何、ですか？」

愛想笑いを浮かべる実希をおいて、脅え顔の親子連れは必死に駅ヨコの交番へと走っていく。

そこで実希は、自分が父を殺したトキの包丁を左手で握っていることと、寝巻きのネグリジェが血で染まっていることを知った。

「……………」

うち、捕まるんじゃない？ な、なんとかしなきゃっ…!!

幸い、交番までは遠いし足の速さには自信がある。

動転した実希は獣のような叫び（コケコッコー!!!）をあげると、母親に遅れをとっている幼児に向かって走り出した。

両手で……………。

包丁を振りあげて。

そして、この日から、実希は殺人犯として指名手配されることになった。

(手配書はニワトリの絵に眼鏡をかけたもの。)

うち、このあとどうなっちゃうんだろう。

とりあえず実希はお昼ごはんを食べることにした。

所持金は……………、3円……………。

「ぶつ……………」

仕方がない……………。 食い逃げだ!!

## 第二羽（後書き）

作 前半 M・N

後半 M・S

こんにちほ。後半を担当させていただきました。M・Sです。  
いつも投稿はM・Yにまかせてしまっています。M・Yいつもあり  
がとう（笑

これからは私も書き込みます。。。。

## 第三羽

金もなく、何もかもが嫌になった実希は、いつそ車に引かれよう道のご真ん中に豪快に寝そべる。

そこへ偶然お金持ちの車が通りかかり、どつという訳か、実希を引き取ることになる。

ああ、なんて幸せなんだろう。

そこから実希の幸せな生活が始まる

「ってなワケないかあー。」

実希は独り言を呟き、ひとつ、ため息をつく。

今いるのは暗い路地。

一人静かに歩いている。

「動くなっ。」

いきなり低い声がした。

背後からだ。

その声とともに、実希は首にナイフを押し付けられる。

「　　っっ!!!?!?」

実希は驚いて声も出なかった。

が、すぐに冷静さを取り戻す。

「何のようだ。」

実希が問うと、相手は「くっくっ。」と笑った。

「お前を売って、ひと稼ぎするのさ。」

きつと、おいしいヤキトリに焼きあがるだろう。」

「……………!!!?!?」

実希の額に青筋が浮き上がる。

実希は、その手に持っていた包丁で、相手を刺す。

バタツ。

相手が倒れこむ。

その音と共に、実希は相手の顔を覗き込むと。

「　　!?!?」

なんと、そこにいたのは幼馴染の友達だった。

実希の首に押し付けていたのはナイフとばかり思っていたが、ただのおもちやだった。

「あ……。」

どうしよう。 また殺しちゃった。

実希は最初こそ深く後悔していたが、時がたつにつれてどうでも良くなってしまった。

「ま、イーよね。 うん。 それより、なんか食べたいなー。」

そう言つて、実希は友の死体を放り出して、また歩きだした。

### 第三羽（後書き）

作 前半 O・M

後半 M・Y

この章では、なんか文がおかしかったりしますが、笑い飛ばしてや  
ってください。

これからも、変なところはいくつかありますが、それも、故意なの  
で、笑い飛ばしてやっていただけるとうれしいです。

## 第四羽

暗い路地を抜けると、大通りに出た。

「おなかすいたーい。」

通り沿いには、ファーストフード店がずらずら。

「ど・れ・に・し・よ・う・か・な」

結局決めたのは【M】がトレードマークの店だった。

「いらっしやいませ〜！」

ちょうど昼なので、お客はたくさんいる。

前列にいたおばさん、子供、親子連れをぬかすと、注文した。

「ースバーガーと、単品でポテト」。あ、あとピッツ　バーガー  
セットで。」

「1050円です。」

お金のない実希は、となりの列に並んでいた小さな子供から財布をむしりとして当然のように払った。

子供の財布には万札がびっしり。

(エッ！　なにコイツ、メツチャ金持ちじゃん!?)

店員から商品をもらって、キョトンとしている子供の財布をもった  
まま店を飛び出した。

(公園かなんかで食べよっと)

第四羽（後書き）

作  
M・N

## 第五羽

もはや実希の心は完全に闇に染まってしまった……。

実希はもう自分が変わってしまったことを感じていた。

公園に入ると、小さな子供がとても大事そうにおいしそうにソフトクリームを食べていた。

実希は、その子に近づくとその子の手からソフトクリームを叩き落とし、その子の目の前でコーンを踏み潰した。

目の前では、その子は一人で泣き叫んでいる。

実希は笑いが止まらなかった。

そうだ。 お昼ごはん

お昼のことを思い出した実希は、ベンチに座り、ご飯タイムに突入（？）した。

そして、 ースバーガー、ポテト、ピッツ バーガーセットを一分で平らげた。

お腹いっぱいになった実希は先ほど子供から奪い取った残りの5万円で一儲けしようとパチンコ店に入っていた。

しかし、実希は今までパチンコをしたことがなく、5万円はあと残り1000円まで減ってしまった。

パチンコ店で大失敗した実希は、腹いせにその辺を歩いていたおばあちゃん×3を殺した。

ぼーっと道を歩いていると、突然目の前が真っ暗になった。

なんだ!?

ブツンッ。

そこで実希の意識は途絶えた。

目が覚めると、そこは小さな部屋だった……。

とはいっても、ただの部屋ではない。

窓には鉄格子……、出口も鉄格子!?

どうやらここは牢獄のようだ。

手にはかせがはめられている。

そして、首には首輪がつけられている……。

いやいや、うちはペットかよ! つか、どんな遊び心だし!?

と実希は思った。

しばらくすると、「コッ……。コッ……。」という足音が聞こえてきた。

それは、見張りの男だった。

「よお。お前の裁判は明日だ。結構な罪を犯しているそうじゃねえか。」

おれは悪人が大嫌いだね……。

明日が楽しみだな。」

そう言って男は出て行った。

第五羽（後書き）

作  
M・S

## 第六羽

実希は実はニワトリになれるという神業を持っていた。

「今こそそれを使うべきだ。」

と、実希はニワトリのことを一心不乱に考え始めた。

夜も寝ずにニワトリのことを考えた。

考えて、考えて、考えまくった。

すると、突然くちばしがよきによきと生えてきた。

と思ったら、だんだん白い毛がフツフツサと体中から生えてきた。

と思ったら、足がだんだん黄色くなっていく。

想像するだけでも気持ち悪すぎる変化を実希は遂げていく。

実希はあつという間にちよつとばかし大きなニワトリとなった。

次の日、例の男がまた実希の部屋の前まで来た。

その男は部屋を見て、びっくり……。

ちよつとばかし大きなニワトリがいるではないか。

例の男は実はニワトリが大好きで大好きで、家で飼っているほどだった。

そこで、例の男は、そのちよつとばかり大きいニワトリを自分の家へと持ち帰った。

ニワトリの体をした実希は「正気かよ。」と思ったが、「まー牢獄から出られるからいいや。」とポジティブに考えた。

その日から例の男は実希（ちよつとばかり大きなニワトリ）を大切に育てた。

餌もじゅうぶんにもらった実希は、体だけがすすくと大きくなった。

しかし実希は思った。

「いつ、こつから逃げようか。 あーあ、めんどくせえー。」

もういつそのままでもいいかと思ったが、もう一回人間に戻っておいしい食べ物をつらふく食べたいとも思った。

第六羽（後書き）

作  
O・M

## 第七羽

ある日、例の男は実希ニワトリを家の外に連れ出した。

例の男がなにやらバーベキューの準備を始めた。

何をするんだろう。

実希は興味深げにその様子を見てみると、例の男は実希に向かってニヤツと笑う。

「俺はな、ニワトリが大好きだ。

目の中に入れてもいいくらいな。」

そう言つて、例の男は実希を両手でがっしりと掴み、目の高さが同じぐらいになるまで実希を持ち上げる。

そして、目を合わせると、うれしそうにニヤニヤと笑う。

「大切に育ててやった。

その分、…おいしいニワトリになってくれよ！」

例の男はそう言い放ち、実希をバーベキューセットの、煙の立ち上る中へと放り投げる。

実希は必死に羽を飛ばたかせて逃げようとする。

「バタツ、バタツ、バタバタバタツ!!」

ああ、もうだめだ。 …… 皆さんサヨウナラ。

実希がそう思いかけたとき。

「 …… つ!? 何だと!!!? 」

例の男の怒声が地上から聞こえてきた。

何のことだろう、と思い、実希はあたりを見渡すと

なんと実希は空を飛んでいたのだ!!!

こうして、史上初の空飛ぶニワトリが誕生した。

(ニワトリになる人間も初なんだけどね)

実希が「おおー、すげえー。」と感心していると……。

ボンツ!

実希のニワトリの<sup>へ</sup>変化が解けてしまった。

「うわあああ……!!」

実希は地上に向けてすばらしいスピードを持って突進していた。

## 第七羽（後書き）

作 M・Y

こんにちは！

この小説、最初はシリアスで押し通すつもりだったのですが、他の三人に吞まれました。

自分まで、壊れてしまったような感じですよ。

主にパソコンにアップしているのは自分なのですが、パソコンの扱いが下手なため、絵を載せたくても載せられなかったり・・・。

普段は、四人でノートに挿絵付きで書いているので、その絵を載せたいなー、いつか載せられるといいなー、と思っています。

他の三人の承諾はまだ取っていませんが・・・（笑

良かったら、感想や意見など書いていただけるとうれしいですよ。

（M・Y一人の考えですが。）

次話も、気が向いたら読んでやってください。

b y M ・ Y

## 第八羽

ポフッ！

バコドカバリーン！！

（こーか音だよ。）

実希が落ちたのは幸いにも洗濯物の上。

物干し竿の破壊音がしたが、実希は全く気にしていない。

一軒家の大き目の家で、実希が突っ込んだ洗濯物は、薔薇が咲き乱れる広い庭に干してあったものだ。

「ふう……命はたすかったあ〜。」

自分がヤキトリにされそうになった事を思い出していると、不意に足音が近づいてきた。

カツ　カツ　カツ　・・・

シートに埋もれている実希はハッと気づいた。

「に、ニワトリにならなきゃ！！」

実希はニワトリになろうとしたが、空を飛んで体力を使ってしまった為、うまくなれない。

(も、もうだめだ……。 まあ、ヤキトリにされなかっただけいいか。)

ポジティブになった実希はヤキトリについて考え始めた。

(ヤキトリだったら……。つくねが好きだなあ)

その時！

実希はなんとヤキトリ(つくね)になっていた。

実希はヤキトリになったことなど全く気付かない。

カツ カツ カツ カツ・・・ ピタッ。

「What happened?!」

どうやら外人らしい女性だった。

女性は壊れていない物干し竿に、下に落ちてしまったタオル、衣類、布団、シーツをかけると、足早に去って行ってしまった。

(よ、良かった……。 さあ、さっさとここから逃げなきゃ！)

そう思ったたとうとしたがヤキトリだからたつこともできない。

「えっ?? 足、くじいたかな?」

第八羽（後書き）

作  
M・N

## 第九羽

「そつだ。人間にもどらなきゃ。」

そう言つて実希は人間になろうと必死に踏ん張つてみた。

すると……。

“ボフツ”

「……………」

(……………あれっ?……)

なんと実希はニワトリにもどってしまった。

「どつしよっ!?　うちは人間に戻りたかつたのに……………」

“コツ…コツ…コツ”

そこへ先ほどの外人が戻ってきた。

どうやら洗濯物を追加しに来たようだ。

実希はとつさに逃げようとした。

しかし、遅かつたようだ。

実希は捕まえられてしまった。

『oh！ コレハニワトリ？！ ドウシテコンナトコロニ？！』

そついいながら女は実希を自宅に連れて行った。

ギィィィ

扉を開けると、そこは薄暗い部屋。。。。

左右には檻の中に動物がいた。

(いやいやいやいや。マジでやばい感じ。……………！！！！！！  
斜め右に見えるのって、ホルマリン漬け……………だっけ？ やばいつて  
！！！！)

外人の女の人は正面へ実希を連れて行く。

実希はハンパない胸騒ぎを覚える。

女の人はどんどん進んでいき、やがて足をとめた。

「！???？ 〜〜〜〜？?!！」

そこで実希が目にしたのは、小さめのサイズの手術台……………みたい  
な。

とにかくその周りにメスとか注射器とか麻酔とか置いてあるヤバそ  
うな場所……………だった。

(まさかこの人……………！！ 解剖マニア？?!！)



第九羽（後書き）

作  
M・S

## 第十羽

実希はしめしめと思った。

この外人さんと仲良くなつて、たくさんおいしい物を食べさせてもらおうと考えた実希は、まず、外人さんとコミュニケーションをとってみた。

とはいっても、実希はバカなので

「ハロー」

ぐらいしかいえない。

困った実希だったが、ここは

「まー、やるかー。」

と、外人さんに

「ハロー」

と挨拶してみた。

すると、むちや気さくな外人さんだったらしく、

「ハローハロー…………… オウ…………… ニワトリー…………… ニワトリー……………」

それから、実希は外人さんと仲良く暮らすことになった。

実希はおいしい物を食べさせてもらえ、夜には一緒にトランプ大会やウノ大会で盛りあがった。

「やあー、幸せだねー。」

と、実希はつくづく思った。

まあ、案の定、実希の仇名は「ニワトリ」で、いつも

「ニワトリ、ニワトリ。」

と呼ばれている。

そこで、実希も何か変な仇名で呼んでやろうと、外人さんを

「ホルマリナー」

と命名した。

「ホルマリナー、ホルマリナー」

と呼んでみると、外人さんはピタととまり、こっちを睨んできた。

そして、ものすごい形相でこっちへ向かってくる。

「ああ、やばいな、これ。 やばいな…。」

実希の体は、もうすでに逃げる体制をとっていた。

第十羽（後書き）

作 O・M

## 第十一羽

外人さん、名づけて『ホルマリン』は、がしっ、と実希の両肩を掴む。

「アナタ、オナジ、ホルマリン好きキーツ!？」

『ホルマリン』すごい興奮度。

顔が赤らめていて、耳たぶまで真っ赤である。

湯気が出そうな勢いである。

せっかくのキレイな顔が台無しだな、と実希は『ホルマリン』を見て思った。

「Oh……・Ye, Yes。」

か細い声で実希が答えると『ホルマリン』は顔を引きつらせる。

興奮度Maxだ。

「ワ、ワ、ワタシ、ホルマリン、ダイ……。」

とんでもなく高い声で『ホルマリン』がしゃべる。

「ダイスキなあのおおよおー……!」

あまりの大音量に実希は耳をふさぐ。

「Ohhh…!! アナタ、ウルサすぎるねー!!」

まげじと大音量でしゃべる実希は、『ホルマリン』独特のカタコトが何気に移っていた。

しばらく二人の間に沈黙が流れる。

と思っていたら『ホルマリン』がいきなり実希に抱きつく。

「ニワトリッ。ワタシ、ニワトリ、ディスクじゃー!!」

「じゃー」って言った???

いろいろ突っ込むところは他にもあるだろう!

第三者がいたのなら、そう言っていただろう。

第十一羽(後書き)

作  
M・Y

## 第十二羽

ホルマリン（これからカッコはつけません。）は、やがて実希を放した。

（・・・ふう〜 汗）

実希はホルマリンのテンションについていけなくなってきた。

実希はなんとか“ホルマリン好き”という誤解を解こうと頑張った。

（あの時焦ってYesって言わなきゃよかった……。）

「あ、あの………実は私、ホルマリン漬け、そんなに好きじゃ

」

「スキ!? ヤッパリネ!!! Come on!!!!!!」

強引に手を引かれ、渋々ついて行くと、今まで言ったことのない階段を下りていく。

地下へと続くようだ。

階段を下りるとほとんど真っ暗で、目を凝らさないとホルマリンの背中は見えない。

ちゃっかりホルマリンは懐中電灯をもっていた。

（てか、廊下長いなー。）

五分ぐらい歩いたかどうか、他のドアより一際大きく立派なドアに  
行き当たった。

懐中電灯がドアに書いてある字を照らす。

英語だ。

【ホルマリン漬研究室】

英語が読めない実希は知る由もない。

ホルマリンは字を見て頷くと、ドア横のパネルに親指を当てた。

ピッ…… 指紋 検証 が できました

どうぞ お入り 下さい

機械の声？ が廊下に反響する。

（なんでここだけ日本語なんだよ。）

実希は心の中で突っ込んだ。

ギイイイ

ドアが軋みつつ開いていく。

中は暗いせいで、色々なところにある水槽が青く照らされているの  
は、みていてなんとも言えぬ気味悪さを感じられた。

一見したところ、かなり広くホールのような感じだ。

(何だここ!!!?)

第十二羽(後書き)

作  
M・N

## 第十三羽

・・・しかし不思議なことに、ホルマリン漬けが見当たらない。

するとホルマリンは「ミキー！　ココへスワッテ〜。」と椅子を差し出した。

実希はあっさりとその椅子に座る。

実希は、ホルマリンが知らないはずの自分の名を呼んでいたことに、全く気付かなかったのだ。

「オホン…　さて…と　…………改めまして、こんにちは！

指名手配中の連続殺人犯…………　太田実希さん　」

「！！！？?!」

実希は気を失いそうになった。

実希の頭は「!?!」だらけになり、今起きたことを理解するのにとても時間がかかった。

「オオタサ〜ン　（笑）　なんちゃって…。　私は殺人捜査班隊長の守屋ツナミ。

ちなみにハーフよ！　今から実希ちゃんにはもう一度牢獄へいってもらいま〜す　」

なぜだかすごく楽しそうなホルマリ……………、守屋ツナミ。

「！？」

実希はヤバイヤバイと、とっさに出口から逃げようとした。

が、ドアが開かない…………… (汗

そこで！！！！

実希は頑張つて事情を説明してみた。

そして10分後……………

「ほー。つまりあなたは父親に殺されかけて父親を殺してしまつたと。

正当防衛を訴えるわけね。」

「し、信じてくれますか！！？」

「うん。まあ、今からあなたの家に捜査隊を向かわせてみるけどね。一緒に生活した仲だし！

信じましょー！！！！」

「やった！！！！」

実希は大喜びで飛び跳ねていた。

が、それもつかの間。

「け・ど!! その後の殺人は？ どうしてかしら？ また正当防衛？ そんなはずないわよね。」

「うっ……………」

実希は言葉に詰まる。

「一体いくつの命が失われてしまったと思っているの…………？ さあ！！」

「どうなのよ!!!？」

第十三羽(後書き)

作  
M・S

## 第十四羽

実希は焦ってこう答えた。

「ホルマリン漬けにしているので助けてください。」

すると守屋ツナミはあっさりと

「いいよ。じゃあ、早速やろうか。」

と、了承した。

実希は

「ああ、いいんだ。まー、いいや。えら呼吸できるし。」

と思った。

守屋ツナミは

「これは面白いものができたぞ。」

と、オークションで実希のホルマリン漬けを売り飛ばした。

しかし、ホルマリンの中の実希はえら呼吸をして生き延びていたのである。

実希のホルマリン漬けを買ったのは、森川よし男という27才のサラリーマンであった。

しかし、普通のサラリーマンではなく、超一流企業のサラリーマンであった。

そのため、森川よし男はお金持ちだった。

実希のホルマリン漬けは森川よし男のひろーい家の玄関に置かれた。

実希は

「よし、こいつが仕事に言っている間に逃げ出してやるっ。」  
としめしめ考えていた。

翌日、森川よし男が仕事に行ったのを見送ると、実希は動き始めた。  
まずは、ビンの中から脱出しようと思ふたを開けようとしたが……。

「あかない………………。うそやーん!!」

ビンのふたが開かないことに気付いた!!

実希は考えて考えて考えた結果

「よし、ビンを割ろう。」

そう思い立って、体を大きく動かした。

パリーン

ピンは地面に落ちて割れ、実希はピンからの脱出に成功した。

「ふう。これで口から呼吸ができる。」

第十四羽(後書き)

作 O・M

## 第十五羽

「脱出するか……。」

しかし、背が低い実希は、ドアの上の方のロックを解除できない。

(ええ……!?!? 一難去ってまた一難ってこういうこと……!?)

どうしようもない実希は、一度家の中にはいつていくことにした。

とつてもひろーい家出、今、実希がいるのはボイラー室。

旧式の家なのでボイラー室があるのだ。

(な、なんじゃーここ??) 【火気厳禁】って書いてあるし、こわっ!)

そこらじゅうの引き出しを開けて楽しんでいると、大きな「(庭)バサミ」がでてきた。

重いのだが、興味を持ったので持ち上げてみた。

(おおー、カッケエ ハサミ)

切れ味を確かめるべく、そこを通っていた管を切ってみた。

スパン、といい音がして切れた。

だが……。

管から流れ出てきたのは蒸気と変な液体。

能天気な実希もさすがに慌てた。

(う、わわわー!!? うえっ、気持ち悪い!!)

ドロドロドロドロ……………

液体は止まることなく流れ出す。

わたわたしつつも、部屋にあったダンボールに乗ってじーっとしているところ…。

玄関のチャイムがけたたましくなった。

パタパタと、2階から降りてくるスリッパの音がした。

そこで、実希はこの家に人がいたことを知った。

外から声がした。

『セコムのものです。 お宅から自動通報があったので……………』

『えっ? そんな、そんなことはありませんけど…?』

『一応確認させていただいてもよろしいですか?』

『え、ええ。 どうぞ。 散らかっていますけど。』

奥さんらしい声がする。

（フンツ。 散らかってなんかいないくせに。）

実希は自分の小汚い部屋を思い出した。

親の顔も、友達のことも。

なんだが、少し寂しくなってきたしまった。

第十五羽（後書き）

作  
M・N

## 第十六羽

寂しさを感じ、すっかり思い出に浸ってしまっている実希。

ぼーっとしていると、突然ドアが開いた。

「この部屋ですかー？ ……なんだか変な匂いがしますね。 って  
！！？」

「ぎゃああっ！！ あれは…、うちの主人が買ってきたホ……………」

「「ほ……………」

「ホルマリン漬けよおーっ！？」

実希はとっさにもう一本、もう一本とそこらの管を切ってみた。

すると「プシューッ！！」と蒸気があふれ出る。

そのスキに、実希は窓から逃げ出した。

実希は運の悪いことに、高い壁の前にとび下りてしまった。

しかもタイミングのいいことによし男が駆けつけてきてしまった。

（どっしりぶつ……………。このまままたホルマリン漬けに…………。いや、  
それはめんどくさい。

よし！ 逃げよう…………！）

決意を固めた実希は壁に立ち向かった。

そして、その抜群の新体能力で見事に壁を登りきった。

そして、実希はしたで呆然としているよし男に

「えら呼吸も悪くなかったぜ(?)」

と、きめ台詞をはいてから逃げ出した。

「クソツ…… あのホルマリン漬けめ。 いつか必ず捕まえてやる  
!」

よし男はそう言って、悔しそうに家の中へと戻っていった。

さて、一方、かっこつけた上にまんまと逃げることに成功した実希は、これまでの罪もなくなったし、これから人生エンジョイだあと、テンションアップ していた。

しかし、これからいく当てもない実希は自宅へ戻ってみることにした。

いってみると、そこではすでに調査は終わったらしく、家に足を踏み入れると懐かしいと思う思いがあふれてきた。

そして、実希は自分の部屋へと向かった。

【Miki's room ハート】

そう書かれた実希の部屋の印。

実希は今までの思い出を思い返しながら、へやを探索した。

すると、引き出しの中に、小学校の時み渡せなかったラブレターを見つけた。

「あっ……。」

モリカワ君にあてた手紙……。

いま、彼はどうしているのだろうか。

実希の心はピンク色に染まった。

小学校の時過ごしていた時間が、よみがえっていく。

しかし、なぜか実希はモリカワ訓のしたの名前を思い出せない。

手紙にも。

モリカワ君へ。。。 (はーと)

ミキより (はーと)

としかかいていない。

まあ、いいや。

と思った実希はこれからのことを考えた。

第十六羽(後書き)

作  
M・S

## 第十七羽

だんだん色々考えるのがめんどーになってきた実希は、家をでて、外をぶらぶら散歩してみた。

「あー、沖縄いきでえー。」

そう思った実希は、本屋にはいつて『沖縄観光BOOK』という本を眺めていた。

「あー、海ー、シーサー、サーターアンダギー……………」

だんだん沖縄に行きたいという願望は強くなっていく。

とうとう我慢できなくなった実希は、沖縄に行くことを決意する。

しかし、実希はお金がなかった。

仕方ないので三日かけて、徒歩で空港に行くことにした。

無謀である。

それは実希も十分分かってはいたがやってみるしか他にないので、やってみることにした。

次の日、朝5:00に家を出発した。

地図もないので女の勘でずんずん前へ進んでいった。

とにかく、歩いて歩いて歩きまくった。

夜になった。

家から持ってきたサバイバル用のテントを道に作って、そこで寝ることにした。

したがごつごつしていてなんとも寝にくいが、実希は根性でしつかり10時間睡眠した。

歩いて二日目。

実希の足はもうがたがただった。

筋肉痛どころではなかった。

しかし、実希はあきらめずに歩いた。

沖繩に行くために歩いた。

そこら辺に落ちていた木の棒を杖代わりにして、よたよた、よたよたと老人のように歩いた。

実希はふと思った。

「またニワトリになってあの日のように飛べばいいじゃないかっ！」

そして、実希はニワトリになろうとニワトリのことを考えて考えて

考えた。

しかし、極度に疲れているのかニワトリに変身するのは無理だった。

実希はショックだった。

コーユー時のためのニワトリじゃないのか……。

実希はもうポジティブに考える余裕などなかった。

第十七羽（後書き）

作  
O・M

## 第十八羽

疲れて一歩ふみ出すのもつらくなつた実希は、場所もかまわず座り込んだ。

(いま、ど、こ、歩いて…… た、んだっけ……?)

どこからか、くしゃくしゃになった地図があつたので、広げて見ようとしたが、疲労で目もくらんでいたため見えない。

(うまく、見え、ない……。 もう、いいや。)

ボタンと道路のど真ん中で寝転んだ実希はそのまま深い眠りについた。

キィィィ

どこか遠くから、ドアの音が聞こえてくる。

「はっ!?!? ……??!?」

実希は広い部屋の大きなベッドにねかされている。

「あら、おきたのね……? 大丈夫なの?」

女性らしい人がすぐ脇に立っている。

(めがねなくしちゃった。このひと、誰だろ?)

超近眼の実希はほとんど周りが見えない。

「お水、置いておくわね……。 ゆっくり休んでいいわよ。」

キィィィ

――バタンッ

(…………どこだ? ココ……。)

体調はよくなったので、ドアを開けてきよろきよろしてみた。

「ん?」

正面のドアを見ると、見覚えのある感じがした。

【ボイラー室】との文字。

標識の下には立ち入り禁止の張り紙。

(うーん。みたことあるよーな……。)

「あっ!?!?」

(ヤバイ!! ここって……、ココって……!!)

カツカツカツ……。

(だ、だれか来た！ とりあえず布団に……)

がばっと布団をかぶって顔を隠すと同時に部屋に人が入ってきた。

「あの、調子はどうかな？」

男性の声でした。

(こ、この人、うちのホルマリン漬けを買った人だあ~~~~!!!!)

幸いにも、実希はホルマリン漬けになったときより髪を短くしたし、チャームポイントである眼鏡がないので、違う人に見えた。

第十八羽（後書き）

作  
M・N

## 第十九羽

が、気付かれた。

「お前！！ あの時のホルマリン漬けたなっ?!」

バ…、バレたっ…。

「おい。」

よし男が話しかける。

「どうして俺がお前（ホルマリン漬け）を買ったかわかるか？ …  
じつは、お前は小学校の時に俺が片思いしていたヤツに生き写しだ  
ったんだよ。」

（えっ……………？）

実希は顔が真っ赤になった。

「よしお……………くん？」

「太田？ ……もしかして、……………本当に太田だったのか？」

よし男は感動の再会とばかりに、両手を大きく広げて、ドラマ風に  
駆け寄ってきた。

…バタンツ。

ドアが開く。

「あなた……………？ どういうこと？」

奥さんが真っ青な顔で立っていた。

「これはその……………」

よし男もたじたじである。

よし男ピーンチ

そのとき、

「おかあさーん！！ うえーん、うえーん！！」

と、子供の泣き声が響きわたった。

「佳子ちゃーん どうしたんでチュカー？」

と奥さんは部屋を出て行った。

実希は絶対この家族とは一緒にいたくないと思った。

「ふう……………」

よし男は実希に向き直った。

「実希……………。俺はお前のことを忘れられなかった。どんなときも……………」

馬鹿みたいだよな、ホルマリン漬けにお前の面影を求めていたのさ。

「

正直、実希はドン引きだったが、片思いしていた相手なので耐えた。

ま、実は両思いっばいけど。

実希はよし男に「サヨナラ」を告げた。

すると、よし男は湯気が出るほどに怒った。

「それならもう一度ホルマリン漬けにしてやる!」

そして、実希の方へと一直線。

どうしようっ!! 何とかしなきゃ!!

第十九羽（後書き）

作  
M・S

## 第二十羽

実希は決心した・・・

もう一度ホルマリン漬になることを・・・。

（そしてえら呼吸をするこ  
とを。）

ホルマリン漬になった実希はまたよし男の家の玄関に置かれることになった。

しかし、よし男の妻が黙ってそれを見ているはずはなかった。

実希のホルマリン漬が玄関に置かれて四日目・・・

とうとうよし男の妻が動き出した。

よし男の妻は実希のホルマリン漬をもって車に飛び乗ると海へと車を走らせた。

海に着くとよし男の妻は実希のホルマリン漬を海へ流してしまっ  
た。

実希のホルマリン漬はユ〜ラユ〜ラと流れていった。

ホルマリンの中の実希は

「あーあー、やっかいなことになったなあー！。」

と、思ったが

「ま、沖縄にいけるかもしれないし、いいかなー。」

と、ポジティブに考えた。

実希は沖縄にいけるかもしれないし、という淡い期待で胸がいつぱいになった。

海に流されて三週間後

ホルマリン漬けの中にいた実希はもう死ぬ寸前まで衰弱していた。

そんな時、実希の目の前に何か島らしきものが見えてきた。

実希はなんだか分からないが、目から涙があふれてきた。

「はあー。 たすかったー。」

あー。 腹減ったー。」

第二十羽（後書き）

作  
O・M

## 第二十一羽

島に、ホルマリンのまま流れ着いた実希は、何とかビンから出たかったが、ビンのふたがなかなかあかない。

島に流れ着いてから三時間

(こっ、すごく暑いな・・・ 誰か助けて~~~~~!)

すると、向こうから人が歩いてきた。

女の子が二人。

小学三年生ぐらいだろう。

「ナニこれ!? キモチわる~~~~~!」

「ええ!? ……人が入ってるんだけど!」

つんつん木の枝でビンをつついている。

実希はその態度にいらいらしたので、ギロツ とにらんでやった。

「死体じゃないの!? ……生きてるよ!!!」

「気持ち悪いから流しちゃおーよー」

(え！？ また流されんの～～～～！?)

実希は焦った。

今までからつと晴れていた空が、何の前触れもなく、急に曇り出した。

ゴロゴロッ

雷の音まで聞こえてきた。

「二人ともー！！ はやく家に戻って！ 嵐が来るわよ！！」

遠くの方から、背の高い女性が走ってくる。

(誰かー助けてー)

実希はビンのふたを自力で開けることができずにくたくたになっていた。

「おかあさーん。 変なのいるー。」

「キモいんだよー。」

実希は子供の言葉はシャットダウンして

‘HELP’

という視線を女性に向ける。

「・・・何かしら、これ?? 可哀想に。 家に入れてあげましよう。」

(ヤターーーーー!! これで助かったあゝゝ)

三人は実希のホルマリン漬けを転がして浜辺の家に入れた。

そこはほったて小屋のようなところで、

家全体が8畳くらいしかない。

昔ながらのいろりなどがあつて、実希はおばあちゃんちを思い出した。

三人の会話など知らずに・・・

『オークションに出したらー? 高く売れて、大きな家に住めるかも!』

『そうねえ・・・ 切りきざんで売った方がいいかしら?』

『割れないように、じょーぶなピンを上からかぶせようよ!』

知らぬうちに夜はふけて、嵐はおさまっていた。

第二十一羽（後書き）

作  
M・N

## 第二十二羽

「あなたはどこから来たの？」

女性は実希にそつと話しかけた。

「えっ!?! えっと……どこだっけ……。あ、そだ、東京だった。」 東京です。」

「そんな所から流されてきたの!?!」

「はぁ……。ここってどこなんですかー？」

実希は女性の言葉をきいた瞬間、驚きと喜びに包まれた。

なんと……。

なんと!!

ここは沖縄だったのだ!!!

女の人はその後、家畜になることを条件に、家に住まわせてもらうことになった。

寝るところは犬小屋のでかいバージョンで基本は首輪をつながれていて

ネームプレートには【ニワトリ】と書いてある。

そんな状況下、実希は一生懸命に働いた。

毎日毎日、雑草を摘むのだ。

本当のこと知らずに

ある日の夜、実希は小屋の中から子供たちの声を聞いた。

「ねーねー。あのニワトリさん（仇名）売っちゃうのー？」

「ママたちが言うてのきいたんだ！！ 多分、ほんとだよー。」

「いくらで売れるかなー？」

「せいぜい百円だよ、きつと。」

「なあんだ。役立たずじゃん。」

子供達の話盗み聞きしていた実希は

（なんだコイツら。ムカつくわあ。）

と思った。

一発殴つたるか？とも思ったが、母親達が気付いて出てきたので、

実希はとっさに狸寝入りをした。

「あなた達！！ 何はなしてるの！？ 早く家に入りなさい！！  
は・や・く！！！」

子供達は、母親をみて、慌てて家までダッシュで戻っていった。

さて、12時（P・M）をまわったところ、実希は脱出をはかって  
みた。

いくら何でも労働がきつすぎると前々から思っていたのだ。

（また売り飛ばされそうな感じだったし……。）

実希は、脱出するにおいて、まずは首輪をどうにかしようとしたの  
だが……。

鎖が切れない。

というか、切れるわけがなかったのである。

（うわぁー、すっかり忘れてたー！！）

そして、頭を抱えるのであった。

そうこうしているうちに、夜が明けてきた。

もうすぐ親子たちがおきてしまう。

「あのヤキトリ、そろそろさばじつやー！」

(いつの間にニワトリからヤキトリに!?)

ちよつと突っ込みどころの違う実希。

「どうすれば、おとなしく切り刻めるのかしら?」

(・・・恐ろしい会話だわー)

他人事みたいのにのんきに考えてから、実希はハツとする。

(って切り刻まれるの、うちだー！！)

やばいよ、やばいよ、と大混乱する実希。

「まずは眠らせないとね。」

足音は

だんだんと

大きくなる・・・

第二十二羽（後書き）

作  
M・S

## 第二十三羽

パニックになった実希はとっさに白目をむいて死んだふりをした。すると、例の親子が実希をみて

「あらまー、死んじゃってるわ、これ。

これじゃ、使い物にならないじゃないの。

せつかく売ろうと思ってたのに、残念だわ。」

そう言つて、あっさり実希を捨てた。

「あー、腹黒い。 腹黒い。

なんちゅー奴らだ。」

実希はそうぶつぶつ呟くが

「まーいーか。」

とポジティブに考えた。

それから実希は沖縄旅行を満喫した。

サーターアンダギーを150個も食べ、シークワァーサージュース

を53杯も飲んだ。

そんなことをしているうちに、実希はみるみる太っていった。

体重が50Kgから95Kgまで増えた。

さすがに実希はポテポテになった自分の体を鏡で直視することができなくなった。

これはヤバイと思った実希だったが、暴飲暴食は止められず、気付いてみたら

体重がなんと100Kgにとうたつしていた。

もーここまでくると、さすがにどうでもよくなったのか、

実希は満面の笑みでドーナッツをバクバクとすごいいきおいで食べている。

こうして実希はどんどん太っていくのであった。

完

第二十三羽（後書き）

作 O・M

## 次回予告！

実は

実希 s t o r y 第二弾が・・・

スタート!!

乞う御期待!!

第二弾の内容について突撃！インタビュー!!

記者：まず、次回作での見所をお願いします。

O・Mさん（実希のモデル）：次回作では一巻で登場した人物がまたまた活躍します。

記者：以上です。

次作にはアノ（・・・）人のお兄ちゃんが

登場!!!? お楽しみに!!

この作品はフィクションです。実際の団体等は一切関係ありません。

無謀な挑戦！

えっとー

このたびは、第一弾が終わった！！と一言で

なんとも無謀な好きなキャラ投票を行わせていただきます！！

って、こんなグダグダな話で好きなキャラなんてできるわけないだ  
ろっ！？

と、重々承知してますが

憧れなので、とりあえず協力？お願いします！！

感想の一言の欄によろしければ

好きなキャラの名前を書いていたければうれしいです！

## 次回予告！（後書き）

M・Yです！

ようやく第一弾（ノート、一冊目）が終わりましたー！！

ってか、終わり方が・・・

まあ、あのひとだからなww

第二十三羽を書いたのはO・M！

つまりは実希の主人公のモデルなのです。

かなりのめんどくさがり屋さんですよw

というわけで、よかつたらこれからも

実希storyをよろしくお願いします！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9259k/>

---

実希story

2010年11月12日11時12分発行